

大学の世界展開力強化事業(2021年度選定) 大阪大学 取組概要

【事業の名称】(選定年度2021年度・(タイプA①))

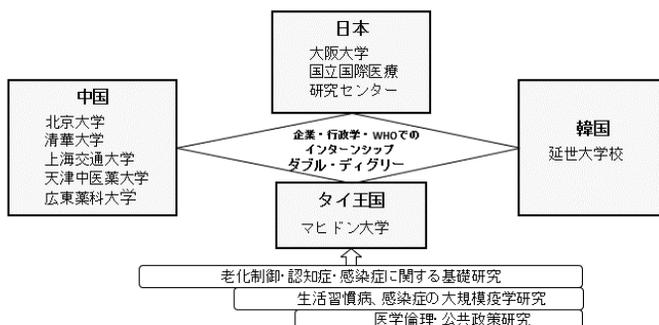
グローバル社会における健康問題解決を担う医学・公衆衛生学研究リーダーの育成

【交流推進事業の概要】

達成目標

わが国初の医学・公衆衛生分野におけるキャンパス・アジアのダブルディグリープログラムの安定運用
世界的健康問題の解決に向けた医学・公衆衛生学研究リーダーの育成
アジアにおける医学教育研究ネットワークの拡大

日中韓タイ王国の大学コンソーシアム (共通カリキュラム・単位互換・成績評価、修了書発行)



【交流プログラムの概要】

現在の新型コロナウイルス感染症のパンデミックで代表されるように、グローバル社会における健康課題の解決は1国のみでは対応できず、国境や地域の垣根を超えた健康課題への対応の体制が必要である。そのため、世界的な健康課題の解決力と各国特有の課題に対応できる人材の育成が急務である。加えてアジア地域では少子高齢化の急激な進展に備え、老化関連疾患への対応が重要であることは論をまたない。大阪大学の中長期的なビジョンである、グローバル社会におけるトップレベルの研究者と、地域社会で活躍できるリーダーの育成を目指し、中国の北京大学、清華大学、上海交通大学、天津中医薬大学、韓国の延世大学校と共同して当事業を実施してきた。更に今年度以降は、感染症対策課題への取り組み並びに教育プログラムの充実のため、当該世界展開力事業をASEAN地域へも拡大し、タイ王国のマヒドン大学、中国の広東薬科大学、大阪大学微生物病研究所、大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻、さらに国立国際医療研究センターが参画し実施する。

【本事業で養成する人材像】

本プログラムでは、東アジアにおいて複雑化する健康課題の解決のため、グローバルヘルスの視点からコミュニケーション力を有し、課題解決のためのリーダーシップを発揮できる、グローバルヘルス・リーダーの育成を目標とする。その中で、最先端の研究知見を見出し、健康課題解決に貢献できる世界的な研究者の育成を目指す。

【本事業の特徴】

本プログラムは、キャンパス・アジア(CA)の基本的枠組みの中で短期・中期・長期の交流を進めているが、なかでも長期派遣・受入プログラムである、博士課程のダブル・ディグリー(DD)制度を実現したことが最大の特長である。DD候補学生は博士課程における4年間の履修期間の内、約2年間海外の大学において講義受講、実習、研究を行い、単位修得並びに論文発表等の研究成果の評価基準をクリアすることでそれぞれの大学での博士学位を取得できる。

【交流予定人数】

		2021	2022	2023	2024	2025
派遣	実際に渡航する学生	9	16	17	19	21
	自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生	60	60	60	60	60
	実渡航とオンライン受講を行う学生	3	7	7	7	7
受入	実際に渡航する学生	9	16	18	21	21
	自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生	80	80	80	80	80
	実渡航とオンライン受講を行う学生	3	7	7	7	7

1. 取組内容の進捗状況(令和3年度)

【グローバル社会における健康問題解決を担う医学・公衆衛生学研究リーダーの育成】
(採択年度 令和3年度)

■ 交流プログラムの実施状況



〈令和3年度国際シンポジウム: プロジェクト紹介〉



〈令和3年度国際シンポジウム: 大阪大学〉



〈DDP学生による研究発表〉

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

短期中期の実渡航での派遣は新型コロナウイルスの感染により中止となったが、ダブル・ディグリー・プログラム(以下DDP)において、延世大学校へ2名派遣した。8月に開催した公衆衛生セミナーには32名、3月に開催したオンライン国際シンポジウム「グローバル社会における健康課題解決を目指す」には6名の学生の参加があった。

○ 外国人留学生の受入

短期中期の実渡航での受入は新型コロナウイルスの感染により中止となったが、DDPにおいて、北京大学より2名、延世大学校より1名受け入れた。3月に開催したオンライン国際シンポジウム「グローバル社会における健康課題解決を目指す」には合計42名(北京大学5名、清華大学3名、天津中医薬大学13名、上海交通大学7名、広東薬科大学13名、延世大学校1名)の学生の参加があった。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

本プログラムではキャンパス・アジアの連携講座教員から成る「キャンパス・アジア教務委員会」を組織しており、成績評価に参加大学間共通の基準と様式を用いることを定めるなど、質の保証の体制整備に努めてきた。新規連携先である、広東薬科大学、マヒドン大学、大阪大学の微生物病研究所、医学系研究科保健学専攻、国立国際医療研究センターとも協力してこのような内部質保証システムを構築すること、また、学生の受け入れ先となる協力教室を拡大し、より多様なニーズに対応できるようにしていくことが今後の課題である。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

受入学生一人ずつに対して、送り出し側の大学の担当者と連携を密にとり、受入れプログラムの作成を行っている。その際、受入学生の研究や学習の希望、要配慮情報等を送り出し大学の教員と共有し、学生と受入れ担当教員との面接や調整等を経て受入れ研究室のマッチングを行っている。学内の新規参画部局においても、このような受け入れ態勢を確実に構築していくことが今後の課題である。派遣学生には、情報の提供やインターネット等を通じた相談を必要に応じて行っている。現地大学の担当者とも密に連携を取り、学生の危機管理、履修相談、生活・言語のサポート等を個別に実施している。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

本事業のHPを開設し、交流プログラムの詳細、交流の実施状況、国際シンポジウムやセミナー等の関連イベントの周知・報告を掲載し、国内外への情報発信として活用している。海外学生へのPRIにより力を入れるために、本学海外拠点である東アジア拠点、及びASEAN拠点と今後連携していく。

■ グッドプラクティス等

3月に日中韓タイ合同のオンライン国際シンポジウムとグループワークを開催した。シンポジウムでは、コンソーシアム大学の教員による講演と同窓会会員による研究発表を行った。グループワークでは複数国の学生が互いに意見を交換し、最終日にはグループ代表者による発表を行い国際的な学生交流の機会を確保した。



〈教員会議〉



〈公衆衛生セミナー〉

	R3	
	計画	実績
学生の派遣	72	40
学生の受入	92	45